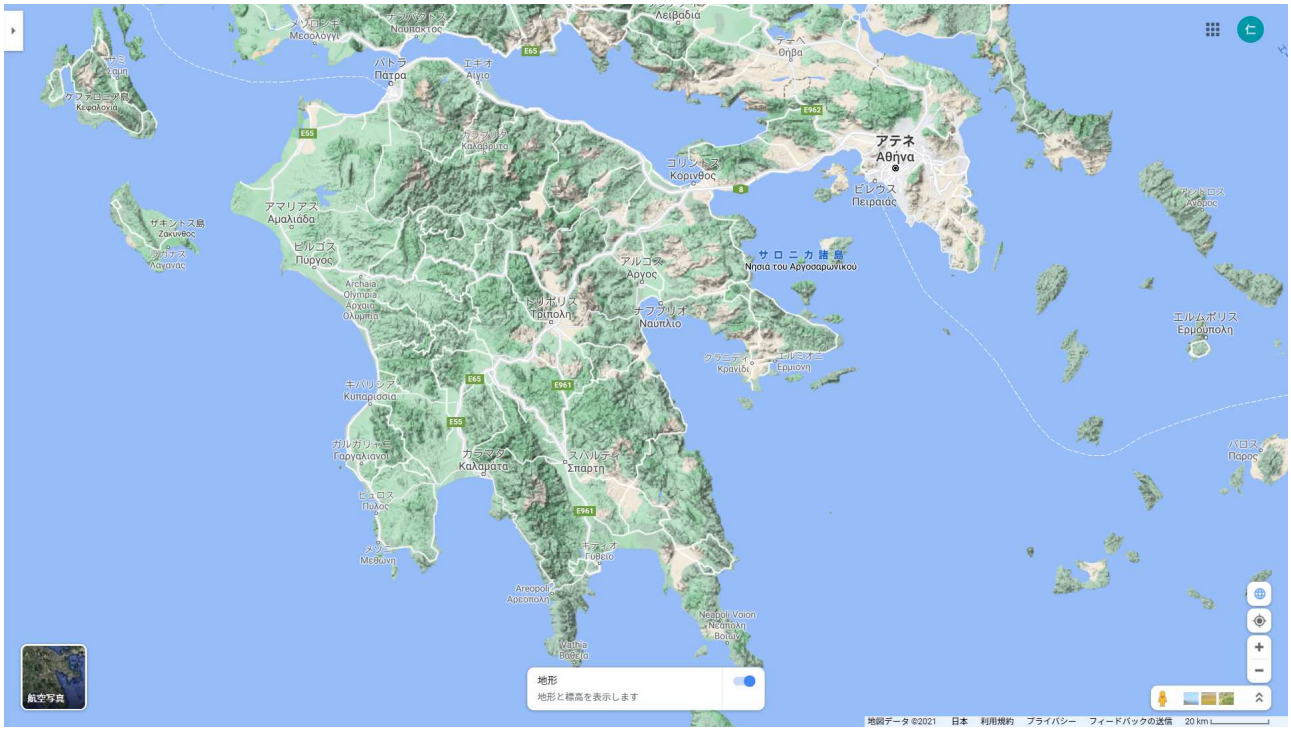
# ペロポネソス半島 Πελοπόννησος　　ギリシア共和国




**ペロポネソス半島とアテネの地図　アテネからコリントス、ミケーネ、ナフプリオ、スパルタ、オリンピアと辿った。**

ペロポネソス半島は、ギリシアの南西部を占める地で、その面積は四国を一回り大きくした 21,000 平方㎞である。その大方が山地で、2,000mを越える山も連なっている。その分、平野は少なく、海岸部や内陸の盆地に居住する人々が多い。乾いた大地が広がっており、オリーブ畑や牧野での土地利用が多い。そこに、ミケーネやオリンピアなど、古代ギリシアに縁の地が点在している。

1990 年 8 月初旬、ギリシアの首都アテネから長距離バスに乗り、ペロポネソス半島へと向かった。当日朝、都心からかなり離れた北西部のキフィスウ・ターミナル(Kifissou)に出かけ、ここからペロポンネソスのアルゴス(Argos)行きの長距離バスに乗車した。この日も空は快晴で、アテネ市街を抜けた頃には、左手にギリシア史で有名な海戦の舞台にもなったサラミス海が、くっきりと眺められた。バスは冷房も入れず窓は開け放しだったが、隣のご婦人が風に黒髪をなびかせていた。その乾いた風に、爽快ささえ感じた。1 時間走った頃、バスはコリント地峡に切り裂いた運河をあっさりと越えた。その時、見逃すまいと北西方向に延びる運河を垣間見た。船が片側通行で通るほどの細長い運河は、エーゲ海とコリントス湾とを 6 ㎞ほどで繋いでいる。

## ミケーネ(Mycenae)の遺跡へ

ここからペロポンネソスの地域となる。バスは間もなくして、現代のコリントス市街※1のはずれで停車。降りる人も少なく、そのまま内陸へと向かう。標高 400m前後の峠道を抜けると、国道がミケーネへと分岐する場所にたどり着く。ここで下車しタクシーをつかまえ、東方の遺跡へと向かう。アルゴスの平野が切れるところで向きを北にかえ、上り坂を行くと、間もなくオリーブ林の中に広場があって、そこが遺跡の入り口だった。ここで初めて大勢の観光客に出会う。ゆっくりと坂を上がると、遺跡の入り口に立ちはだかる城壁に獅子門が穿(うが)たれていた。

**獅子の門　門の上で二頭のライオンが向き合っている**

門をくぐるとすぐ右側に円形の墳墓が露出していた。アテネで見て来た「ミケーネの黄金のマスク」はこの中から出土したものだ。ドイツのメクレンブルク出身のハインリッヒ=シュリーマン(Heinrich Schliemann)が、幼い頃に親しんだホメロスの叙事詩に魅せられこの地を訪れたのは、1874 年。その前年にエーゲ海の東側、小アジアの丘上にトロイアの遺跡を発掘していたシュリーマンは、詩に詠われたトロイア戦争の相手であったミケーネこそこの地だと推定し、発掘人にのみをふるわせた。出て来たのが、この黄金のマスク。シュリーマンはこれを伝説の王アガメムノンのものと断定した。現代では、出土した地層から誤りとされているが、この発掘は十分当時の欧州にセンセーションを巻き起こした。

周りが切れ落ちている高台の奥へと緩やかな坂を上る。遺跡は残念ながら建物の姿を留めていない。腰高くらいの石積みが、かろうじてそこに王宮があり間取りの区画があったことを伝えていた。最上部に近いテラス状の広間跡は、メガロンと呼ばれる宮殿の中心だった。ここまで来ると高台は、その背後に見上げるような二つの山に囲まれ、守りに堅い城砦だったことが容易に想像できた。南西方向にはアルゴスの平野が見おろされ、その先にはこれから向かうアルゴリス湾がうっすらと望見された。素晴らしい眺めだった。その意味でも、ミケーネは戦略上の要衝だった。

ミケーネ文明は、紀元前 16 世紀から 12 世紀にかけて、ここアルゴスの地に栄えた。それ以前のクレタ文明が平和な民の文明だったのに対し、ミケーネは王宮が城砦だったことからわかるように戦う戦士の文明だった。中でも前 13 世紀のトロイアとの戦争は、その王アガメムノンがギリシア側の総大将として参戦し、10 年近くの抗争の末、撤退と見せかけて和睦の印しとして巨大な木馬を差し入れ、この中に隠れた味方が砦の門を中から開けるという奇策によって勝利した、という故事を後世に残している。

シュリーマンがロマン溢れる神話に興奮したのもわかる気がする。しかし、大人の物語として読むと、総大将アガメムノンが凱旋した後、夫を殺されて無理やり妃にさせられていたクリュタイムネストラが愛人アイギストスと図って王を惨殺するなど、性格の荒い英雄にまつわるどろどろした人間劇でもある。この後、クリュタイムネストラは父を殺された実子オレステースによってかたき討ちに会う。英国の歴史家、ウィリアム=マクニール(W.H.Mcneill)は、これらの神話を「エーゲ海を荒らす海賊」の話しと断じている。※2

**ミケーネ王宮のあった高台　背後に二つの乾いた峰**

獅子門をくぐって広場まで戻ると、今度はその足で坂を下り、ミケーネでは最も保存状態の良い「アトレウスの宝庫」を訪ねた。宝庫と呼んでも、現代ではこの地を治めたアト

レウス家の代々の墳墓ではないか、とされている。道路わきに真っ直ぐ墓へ向かう切通しの通路があった。そこから中へ入ると、照明もない薄明りの内部は直径も高さも 14m前後の円蓋状でしっかりとした石積みに支えられていた。3,000 年以上前の人が作ったという点では、確かにその土木技術には驚かされる。外の暑さにばて気味の私は、ここで涼をと思ったが、意外に蒸し暑くそれはかなわなかった。人の出入りが多かったせいだろうか。

昼を過ぎて、広場からバスに乗りアルゴスの平野を南下。途中、東側にティリンスの城砦跡を認める。ここまで来ると海はすぐそこ。ミケーネが内陸深く立地し守りの砦であったのに対し、ティリンスはここから船出して攻めるための基地だったのだろう。

## ナフプリオン(Nafplion)の港にて

バスは終点の港町、ナフプリオンに達した。ペロポネソス随一のリゾート地である。まずは今夜の宿探し。旧市街の岸壁から少し離れた静かな宿をとった。そこで古代の野外劇場で有名なエピダヴロス(Epidavros) ※3行きのバス時刻表を探すが、今日の便はすでに出発済み。残念ながらその訪問はかなわなかった。暑さにやられていたので、先ずは昼寝を取ることにした。

**パラミディー要塞から半島の街ナフプリオを見下ろす**

午後遅くに宿を出て、港沿いを歩く。沖合に目立つ島が見えた。こちらは、ヴェネツィア人が中世の時代に構築した要塞だったとか。さらに遡ると十字軍時代にフランク人の侵入もあったとか、重層的な歴史をいだく街でもあった。見上げると険しい丘の上高く、パラミディーの要塞が今も堅固な防壁を伝って聳(そび)えていた。さらに海岸沿いを半島の突端の方へと進む。右手に海、左手に丘へと昇る崖。その間の細い道、平石で葺かれた舗装路を歩む。海からの風も強く、海面が波打っていた。昼の暑さが嘘の様。遠くにはペロポネソスの山並みが広がり、雲も湧いていた。なかなかの景観を目の当たりにしていた。

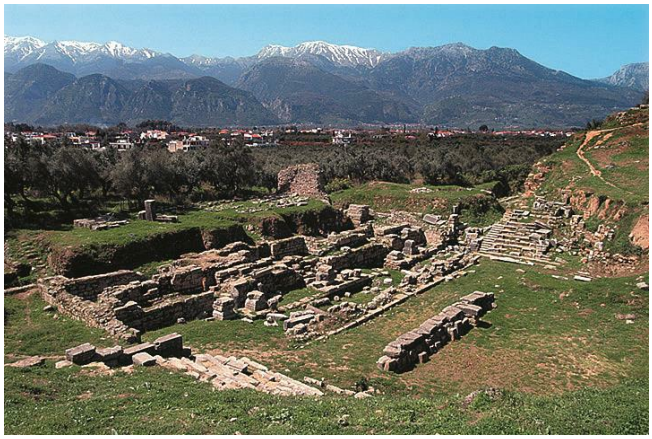
ナフプリオの旧市街は自動車交通の侵入を抑えており、通りには道沿いの飲食店がきれいにクロスをかけたテーブルを広げ、来店客を待ち構えていた。まるで道路がそのままレストランになった風情。これも夏の半年間、晴れの日が続く地中海性気候故の仕掛けだった。そこで晩飯にスパゲッティーをほお張ったことを思い出す。

## スパルタ(Sparta)へ

翌朝、バスでさらに半島の奥へと向かう。一度高地へと上った所に、四方から道路が集まるトリポリスの街があった。ここでバスを乗り換え、南方のラコニアの平野へと降りて行く。乾いた灌木が点在する土地をバスはゆっくりとスパルタを目ざした。その下った所に、スパルタ市街が広がっていた。

街の中心となる大通りには、その分離帯にヤシの樹が連なっていた。何となく南国気分が漂う。先ずは、この地の北側にあったアクロポリスの丘をめざす。しかし、アゴラと呼ばれる場所はオリーブ畑に利用されていたり、2 万人を収容できたと言われる劇場跡も、その階段状の客席に使われていた石が運び出されて原型を留めず、辺りは緑に覆われていた。ここでは遺跡を見学したと言うより、廃墟を

散策したという経験のみだった。



**遺跡から望むスパルタ市街　背後にタイゲトスの山並**

丘を下り再び市街地の方に戻った際、市民競技場の前の広場にスパルタの戦士の像を見とめた。鉄の兜(かぶと)をかぶり、両手に剣と盾をもった精悍な戦士を表していた。これがスパルティアタイと呼ばれる古代スパルタの市民階級の男子を象徴するものだ。スパルタには、盛時に5万人の市民と、その四倍にも及ぶヘロット(奴隷階級)がいた。初めミケーネに通じるアカイア人が原住していたが、後から侵入した少数のドーリア人がこの地を征服し、被征服民が奴隷におとされた。そして征服民が市民として彼らを支配するようになった。紀元前12世紀頃のことである。

南北に長いラコニアの平野は、他のポリス(都市国家)と比べ広い耕地を確保できた。奴隷たちはそこで農業を営んだ。そして食料が自給できたために、スパルタはアテネのような貿易国家とはならず、鎖国の道を選んだ。紀元前8世紀頃のことである。高山に囲まれた地形を見れば、なるほどと合点がいった。

もっとも、この体制を維持するためには、少数のスパルタ市民が戦士として精強でなけらばならなかった。市民の男子は、その誕生の時から虚弱児を排し、少年期から親元を離れ軍営での集団生活を強いられた。俗に言うスパルタ教育の姿だった。そして多数派の奴隷が反乱した際には、力で鎮圧する戦士となった。紀元前5世紀のペルシア戦争の際は、その王レオニダスが300の兵を率い、テルモピュライ(Thermopyles)の戦いで奮戦し、玉砕してまでペルシアの進軍を防いだことは、あまりにも有名。しかし、スパルタのようなポリスはあくまでも例外で、鎖国をとった例は150近くあったと言われるポリスの中では皆無に近いと言われている。

## 国際旅団(International Brigade)

午後のバスで、再びトリポリスのある高地へと上る。ここで立ち寄った店の主人が何と日本語で話しかけてきた。何でも若い頃、船で横浜に寄港することが多く、片言ならしゃべられるようになったと言う。驚きだった。トリポリスは内陸の地だが、ギリシアは世界有数の海運国。こうしたことが、珍しくない土地柄なのだろう。

さて、ターミナルでオリンピアへと向かう長距離バスの発車を待つ。このバスを待つ顔ぶれが、出身国も多様でしかも若い小グループのバックパッカーが多く、彼らは乗車前から盛り上がっていた。これから5時間近いバス旅が始まる。かなりハードだと思った。共にオリンピアをめざす同乗者を、私は秘かに「国際旅団(インタナショナル・ブリゲード)」と呼ぶことにした。※4

市街地を抜けると草原や農地が続いた。この地は、その牧歌的な風景から、アルカディア(桃源郷の一種)と呼ばれてきた。バスはその山がちな土地を東から西へと横断することになる。車内は混んでいたが、窓際に坐るこの東洋人の隣は暫く空席だった。やがて恰幅の良い黒装束のギリシア正教の司祭が乗り込んできて、その席に座った。しかし、その体形では本人もそして私も窮屈さを感じたものだ。一時、牧場が続くところなのに何故かバスが長く停車した。それを不思議に思ったが、やがてバスが動き出した時、思わず笑ってし

まった。羊の群れが羊飼いに引き連れられ、道を横断した所だった。その土埃がすごい。この地ではバスの進行より、牧人の行動を優先するらしかった。

次のバス停で司祭を含む何人かが降りて行った。席に余裕が出来て喜んでいると、バスは街道から孤立した街まで往復していつの間にか戻って来た。何とそこで例の司祭を含む何人かが、再び乗車した。思わぬ展開に戸惑ったのを覚えている。このルートは進めば進むほど、山岳風景が広がって来た。その分何度も、カーブを描いて走って行く。とある山道で停車したかと思うと、目の上の山腹に赤瓦を載せた家々が緑の間に散在していた。この風景は、何と表現したら良いか、とにかく美しかった。その光景に、バスの中からもため息がもれた。サンダル履きの青年が一人、前の道路に出て行って、思わずカメラを向けていた。帰国してから調べたら、アルカディア地方のディミツァナ(Dimitsana)と言う集落であることがわかった。いつの日かまた・・・

**ディミツァナの街を遠望**

街を過ぎた頃、次第に宵闇が迫って来て、バスは険しい山の尾根道を下って行った。集落の灯りが見えたが、近づいて行くと、煌々(こうこう)とした灯りの下で人々が集まり飲み食いしている所だった。よくもこんな奥地に人の居住地があるものだと感心した。やがて長い旅路にすっかり疲れた頃、バスは漸くオリンピアの街にたどり着いた。旅団は解散した。

## オリンピア(Olympia)にて

翌朝は、疲れのせいで多少寝坊し、朝食のためホテル前のカフェテラスに出てみた。インド人の老夫婦と相席になったが、街は世界中からの旅行客で溢れていた。

さて、オリンピアの遺跡は街の東側を貫流する小川を渡ってすぐの所にあった。この地は言うまでもなく、古代オリンピック開催の地で、四年に一度ギリシアの諸ポリスが集って、オリンピア競技会を開催した伝統と歴史を持つ。入ってすぐ右側にあるのは、闘技場(パレストラ)の跡、その付帯設備として練習場(ギムナシオン)も備わっていた。さらに奥には神官たちの宿泊施設、さらに参加選手の宿泊施設としてレオニデオンという正方形の建物跡があった。この建物跡は、基壇の規模からして、オリンピアで最大規模の建造物だったそうだ。現代ならさしずめ「選手村・迎賓館」と言ったところだ。

そこから東側に目を転ずると、この地の守護神と言ってよいゼウスの神殿と、ゼウスの妃ヘラを祀ったヘラ神殿とがあったエリアとなる。倒れた大理石が無造作に置かれていた。ヘラ神殿跡は、例の聖火を太陽光から採取する行事の舞台となっている。その北側の丘の麓沿いに、各ポリスの宝庫と呼ばれる石造りの小さな建物跡が東西一列に並んでいた。これはギリシア本土のポリスではなく、黒海沿岸やイタリア半島南部に移民して造られたポリスからのものだった。

そしてこのエリアの東側に延びる石壁の向こうにスタジアムと呼ぶ競技場の跡が細長く横たわっていた。壁の北端に近い所に開口がありそこを入ると、緑の芝生と茶白色のグラウンドが見えて来た。奥へと伸びるグラウン

ドは長さ 192m、幅 30mで、手前に横断する白石の線がゴール、遥か奥にある白石がスタートラインだったと言われる。私もそのスタートラインに立って、徒競走の真似事をやってみた。

今から 2,000 年以上も前、ここに全ギリシアのポリスを代表して屈強な青年たちが集められ、全身にオリーブオイルを塗り広げ、このグラウンドに立った。南北両側の緩い芝生の斜面にポリスから応援に駆け付けた観客が、その青年たちの躍動を興奮しながら眺めたに違いない。ただし、女性の参加は認められず、一部の女性神官以外、観客としても受け入れられなかった。

**オリンピア遺跡の東側に延びるスタジアム**

遺跡を一巡して街へと戻る際、道路際に駐車した車から何やら音楽が聞こえて来た。外には立てかけた大型モニターも。実はこの時、ギリシアのオリンピック委員会は近代オリンピック百年となる 96 年のギリシア開催を呼びかけており、世界中からの訪問者に開催支持のプロモーションを行っていたのだ。残念ながらアテネは選定されず、米国のアトランタが開催地となったが、その 8 年後の 2004 年、第 28 回オリンピック大会の開催地に選ばれることになった。

さて、街を去る前にもう一つ行こうと思っていたのが、オリンピア考古博物館。遺跡での出土品中心の展示だったが、神殿の破風を飾っていたレリーフの彫像などが丁寧に集められ、なかなか見応えのある内容だった。古代オリンピックの歴史は、紀元前 8 世紀から紀元後のローマ滅亡前の 4 世紀まで、実に 1,200 年もの長期に渡ったそうだ。そう、グレコ・ローマンと言う言葉がある通り、ギリシアを越えて古代ローマにも受け継がれ開催されていた。種目は格闘技や陸上だけでなく、映画『ベンハー』に登場した馬が引く戦車競走や、ただ馬が走る競馬なども行われたと言う。

しかし、そんな広大な競技場は遺跡には見当たらなかった。実は遺跡の南にはアルフィオス川が当時も今も流れているが、その川の度重なる氾濫によってこの地にあった競馬場は土砂に埋もれてしまったのだと言う。アルフィオス河によって一面の砂原になってしまっていた、昔の白黒写真が印象的だった。

ポリス時代のギリシアは、ポリス間での戦いに明け暮れることがしばしばだった。しかしその際も、競技会の開催時は矛を納め、この僻遠(へきえん)の地に全ギリシアのポリスの代表が集い、大神ゼウスを祀る 5 日間の祭典を敢行したと言う。クーベルタン男爵が提唱した近代オリンピックは、その精神を受け継いだはずだ。しかし、そのオリンピック停戦はご承知の通り、未だに完全なものにはなっていない。

## パトラ(Patra)からイタリアへ

その日の午後、オリンピアに別れを告げ、この地に来て初めて鉄道に乗った。先ずは沿岸部のピルゴス(Pirgos)行きの列車。これほど揺れる列車に乗るのは初めての経験だった。そして近くに坐った少年たちが、日本人と見て盛んに”Ninja!Ninja!”と騒ぎ立てる。これには苦笑するしかなかった。ピルゴスで乗り換え、半島北西部を幹線鉄道で北上、夕刻に漸くパトラの街に着いた。港には、アドリアティカ(Adriatica)社の旅客船が待っていた。

船出した旅客船の後部デッキに上ってみた。真っ直ぐな航跡の白波の先には、パトラの街並みが広がっていた。これで 10 日近い初めてのギリシアの旅は終わった。古代文明がぎゅっと凝縮された土地でもあったため、予定より 2 日も多くこの地の旅に要した。※5
その旅でわかったことがある。ギリシア人と言うと、どうも小太りでずんぐりした黒髪の西洋人をイメージしていた。一方でミロス島で発見されたヴィーナスのように、長身で彫りの深い美形の古代人がいたはずで、どうも矛盾したギリシア人観を私はいだいていた。実は現代ギリシア人はその容貌や髪色に関して多種多様であり、特に小太りのイメージは偏見に近かったのだ。ささいな発見だった。

船はこの後、日本人にもなじみあるラフカディオ=ハーンの出身地レフカダ(Lefkada)島近くを進み、アドリア海に入り、一晩かけてイタリアのブリンディジ(Brindisi)へと向かった。

※1　ローマ時代の旧コリントスは、もう少し内陸。バスの行く手の右側に見えて来た丘、アクロコリントスの麓にあったと言う。使徒パウロが訪ねたのはこの街。ギリシア最大の商業都市だったという。

※2　WHマクニールの著『世界史』(上)中公文庫版による。

※3　写真のエピダヴロスは、今日もっとも保存の良い古代の野外劇場で、毎夏フェスティバルでギリシアの古典劇が上演されている。14,000 人の入場が可能。

※4　歴史上の『国際旅団』とは、1930 年代のスペイン内戦で共和国政府を守るため、各国の市民が集まり結成されたもの。何もこんな例えを言わなくてもと、言われそうだが、直観的にそう思った次第です。

※5　アドリアティカ汽船の乗車切符は、事前にアテネの事務所で購入していた。しかし、日程の都合が難しくなり、乗車日を延期してもらう経緯があった。